みちのく余情

文人が愛した風物と詩情

井上ひさし　大岡昇平　草野心平　岡本綺堂　水上勉　吉村昭　豊田穣　飯田龍太　亀井勝一郎
山本健吉　宮沢賢治　柳田国男　三浦哲郎　檀一雄　太宰治　大町桂月　高井有一　古山高麗雄
山口瞳　立原正秋　田山花袋　古井由吉　藤沢周平　牧羊子　斎藤茂吉　丸谷才一　木山捷平

日文 701681426

人が愛し風物の詩情

奈良のく余情

山本容朗編

中尊寺金色堂

有楽出版社発行・実業之日本社発売

みちのく余情

1982年7月30日　初版発行
編　者　山本　容朗
発行者　峯島　正行

発行所　有楽出版社
〒104　東京都中央区銀座2-4-2
誠佳ビル6階
電話　03(567)3784

発売所　実業之日本社
本社　〒104　東京都中央区銀座1-3-9
電話　03(535)4441　振替　東京1-326
支局　大阪市北区曾根崎　2-12-7
梅田第一ビル
電話　06(312)1573

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　共文堂

乱丁，落丁の場合はお取り替えいたします。
© 0095-883040-3214　Printed in Japan

みちのく余情

——文人が愛した風物と詩情——

みちのく余情＊目次

〔一〕

〈小説〉あくる朝の蟬＊井上ひさし　七
夏の旅＊大岡昇平　二三
阿武隈高原の一隅＊草野心平　二五
仙台五色筆＊岡本綺堂　二九
松島湾のカキと浜汁＊豊田　穣　四〇
塩釜＊飯田龍太　四八
中尊寺＊亀井勝一郎　五八
奥の細道＊山本健吉　七一
〈詩三編〉くらかけ山の雪ほか＊宮沢賢治　七七
伝説のふるさと・遠野＊水上　勉　八三

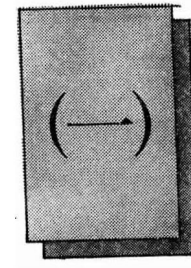
〔二〕

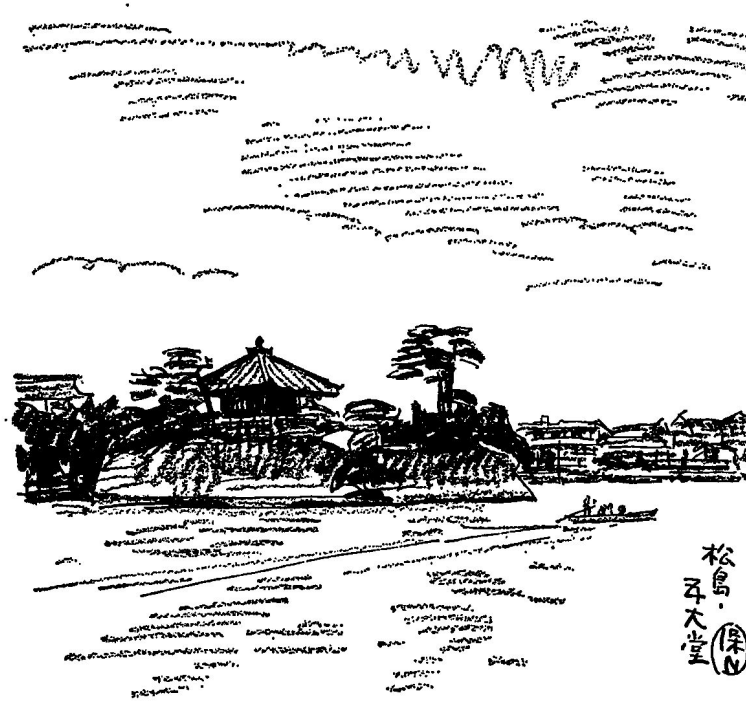
旅に出る＊吉村　昭　九五
清光館哀史＊柳田国男　一〇一
シバレの晩の記憶＊三浦哲郎　一〇七

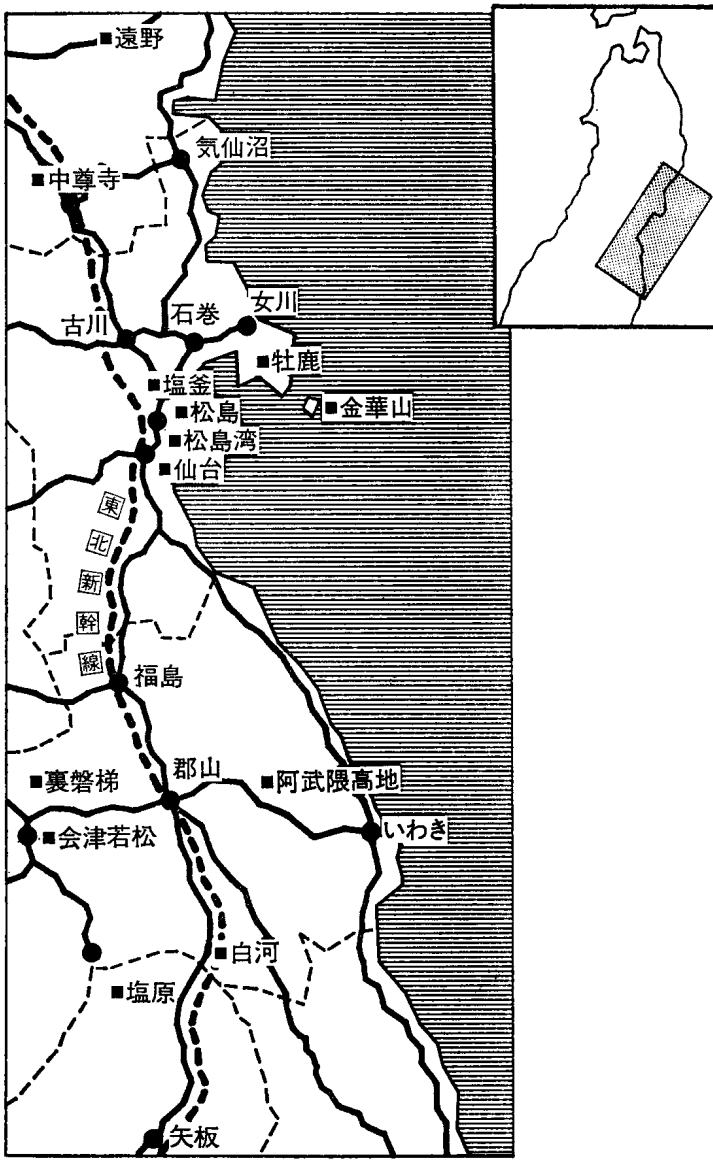
试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

美味放浪記（津軽・南部）＊檀　一雄　一〇九
〈小説〉雀と＊太宰　治　一一七
十和田湖＊大町桂月　一三一
津軽十三湖と金木の宿＊高井有一　一四〇
十三湖砂山時雨＊山口　瞳　一四九
〔三〕
牡鹿から男鹿へ＊古山高麗雄　一六三
角館＊立原正秋　一七六
最上川＊田山花袋　一八四
秋雨の最上川＊古井由吉　一九四
出羽三山＊藤沢周平　一九六
羽州月山宝乃山＊牧　羊子　二〇一
鯉＊斎藤茂吉　二〇八
丸やギ左衛門のこと＊丸谷才一　二一〇
〈小説〉鼠ケ関＊木山捷平　二一三
編者あとがき　二三六

装画／永井　保
装幀／サン・プランニング
地図／K&S


(一)


松島・五大堂


■遠野
気仙沼
■中尊寺
女川
石巻
古川
■牡鹿
■塩釜
■松島
■金華山
■松島湾
■仙台
東北新幹線
福島
郡山
■裏磐梯
■阿武隈高地
■会津若松
いわき
■白河
■塩原
矢板

〈小説〉あくる朝の蟬＊井上ひさし

一九七三年九月

汽車を降りたのはふたりだけだった。

シャツの襟が汗で汚れるのを防ぐためだろう、頸から手拭いを垂らした年配の駅員が柱に凭れて改札口の番をしていた。その駅員の手に押しつけるようにして切符を二枚渡し、待合室をほんの四、五歩で横切ってぼくは外へ出た。すぐ目の前を、荷車を曳いた老馬が尻尾で蠅を追いながら通り過ぎ、馬糞のまじった土埃りと汗で湿った革馬具の饐えた匂いを置いていった。

土埃りと革馬具の饐えた匂いを深々と吸い込んでいると、弟が追いついてきて横に並んだ。弟は口を尖らせていた。ぼくがひとりでさっさと改札口を通り抜けたことが、自分が置いてきぼりにされたことが不満なのだろう。

「思い切り息をしてごらんよ」

弟にぼくは言った。

「空気が馬くさいだろう。これがぼくらの生れたところの匂いなんだ」

弟はボストンバッグを地面におろし、顔をあげて深く息を吸い込んだ。

「どうだ、この匂いを憶えているだろう？」

「ぜんぜん」

孤児院のカナダ人修道士がよくやるように弟は肩を竦めてみせた。

「べつにどうってことのない田舎の匂いじゃないか」

弟がこの町を出たときはまだ小さかった。この匂いが記憶にないのは当然かもしれない。でもぼくにはこの馬の匂いと生れ故郷の町とを切り離して考えることは出来なかった。町は米作で成り立っていた。冬、雪に覆われた田に堆肥を運ぶのも、春、雪の下から顕われた田の黒土を耕すのも、夏、重い鉄の爪を引いて田の草を除くの

も、そして秋、稲束を納屋まで運ぶのも、みんな馬の仕事だった。ぼくが此処を離れたのは三年前の春だったが、そのとき町にあった自動車は十数台の乗合バスと、それとほぼ同数のトラックだけで、運搬の仕事もそのほとんどを馬たちが引き受けていた。とくに冬季は深い雪のために自動車はものの役に立たず、そのときの町は橇を曳いた馬たちの天下になった。そんなわけで馬糞と革馬具の匂いはこの町そのものなのだ。ぼくはもういちど馬くさい空気を胸いっぱい吸い込んだ。

ぼくと弟を乗せてきた汽車が背後で発車の汽笛を鳴らした。駅前の桜並木で鳴いていた蟬たちが汽笛に愕いてすこしの間黙り込んだ。汽笛にうながされて、ぼくは並木の下の日蔭を拾いながら歩き始めた。

薬売りの行商人や馬商人たちの泊まる食堂を兼ねた旅館、本棚にだいぶ隙間のある書店、昼はラーメン屋だがあたりが黄昏れてくると軒に赤提灯をさげる二足草鞋の店、海から遠いのでいつも干魚ばかり並べている魚屋、農耕機具と肥料を扱う一方で生命保険会社の出張所もつとめている店、軒先の縁台で氷水をたべさせる菓子屋など街並みは三年前とほとんど変っていない。真夏の午後の炎暑を避けて桜並木の通りには人影もなかった。四周を山で囲まれているために暑気の抜ける隙間がなく、北国なのにこの町の夏は妙に蒸し暑いのである。

「待ってよぅ」

ぼくの足を追い切れず、はるかうしろで弟が音をあげた。細紐で縛ったトランクを地面に置き、その上に腰をおろしてぼくは弟が追いつくのを待った。トランクは死んだ父親が学生時代に使っていたという年代物で、角などに打った補強の金具はひとつ残らずとれており、錠もばかになっていた。細紐は錠のかわりだった。

桜並木はあと十数米で尽きようとしていた。そして尽きたところで旧街道とぶっつかる。旧街道を右に曲って三町ほど行くともう祖母の家のはずだった。ぼくと弟は夏休みの後半をその祖母の許で過すために、仙台の孤児院から故郷の町へ着いたところだった。

ぼくが高校一年、弟が小学四年のときのことである。

「もうすこし、もうひと息」

追いついてきた弟に調子をとるように声をかけながらぼくはまた歩き出した。弟は両手で持ったボストンバッグの重さと釣り合いをとるために軀をうしろに反らせよたよたついてきた。旧街道はかなり大きな川に沿って続いているはずだった。川からの風はきっと涼しいだろう。川風が荷物の重さをすこしは忘れさせてくれるにちがいない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

「もうちょっと行くと楽になるよ」

額の汗を手の甲で払って、ぼくは弟にまた声をかけた。ぼくが祖母の許へ来ることを思いついたのは、夏休みが始まって十日ばかり経ってからだった。孤児院の夏休みはひどい重労働だったのでどこかへ逃げ出す手はないかと必死で思案をめぐらせ、祖母のことを思い出したというわけである。孤児院の夏休みがなぜ重労働かというと、この期間に市民の善意や心づくしがどっと集中するからだった。

夏休み第一日は市の青年商工会議所有志の招待による海水浴、第二日は市の福祉団体連合会の主催する『よい子の夏まつり』への参加、第三日は孤児院の近くの商店街の招きでお化け屋敷と花火大会の見学、第四日は米軍キャンプのGIたちの肝煎でアメリカン・スクールの少年たちとの対抗運動会、第五日第六日は市のボーイスカウト支部の招きで河畔キャンプ、第七日第八日はガールスカウト支部の誘いで高原キャンプ、第九日は市の婦人団体共催の『一日母子の会』への参加……というような具合で善意と心づくしで揉みくちゃにされてしまう。なにしろこれらの善意の人たちは自分たちの施す心づくしがぼくらにどれだけ喜ばれているかをとても知りたがっていた。だからぼくらは心づくしへのお返しに必要以上に嬉しがり、はしゃぎ、甘えてみせなくてはならなかった。そうするよりお返しのしようがなかったわけだが、これはずいぶん芯の疲れることだった。

第九日『一日母子の会』から帰ったぼくは、孤児院の事務室の黒板に、

「第十日、市内高校演劇部共催・夏の人形劇大会。第十一日、市営プール主催・市内養護施設対抗水泳大会。第十二日、地元有力紙主催・親のない子と子のない親たちの七夕まつり……」

と書いてあるのを読み、このままでは夏休みの終らぬうちに過労のために仆れてしまうのではないかと怯え、祖母にあてて手紙をしたためた。

「故郷を後にしてから早いもので三年たちました。驚かないでください。ぼくと弟はいま孤児院にいます」

たしかこんな書き出しだった。これに続けてぼくはたぶん次のように書いたはずだ。

「ぼくらが孤児院に入ったわけは、母の商売がうまく行かないからです。母は、男と同じように女にも意地というものがある、たとえどんなに困っても、またどんなに辛くても、祖母に泣きついてくれるな、手紙を出すのもいけないよ、と言っています。でも、ぼくらはつくづく孤児院にいるのに疲れました。かと言って母のところへ

は帰れません。母は旅館の住込みの女中さんをしているのです。祖母、突然のお願いですみませんが、ぼくらを祖母のところへ置いてくれませんか」

夏休みの間だけでもいい、と書かなかったのは、ひょっとしたら祖母がぼくらを夏休みの間だけではなくずっと孤児院から引き取ってくれるかもしれないという期待があったからだ。

祖母からの返事はなかなか届かなかった。祖母は母のことを相当ひどく怒っている、祖母と母はぼくらが想像する以上に憎み合っているらしい。そう思って諦めかけたところへ書留が舞い込んだ。

「とにかく帰っておいで」

千円札を二枚、飯粒で丁寧に貼りつけた便箋に電文のような一行が書きつけてあった。

川の音が聞えてきた。桜並木を通り抜けて旧街道へ出たのだ。ぼくは橋の欄干に腰をおろし、今度もぼくの足に追いつかないでいる弟を待つことにした。橋を渡って左に曲れば三町ほどで祖母の家である。右に折れて五町ばかり川に沿って上流へさかのぼれば三年前までぼくらの住んでいた家があるはずだ。もうその家は人手に渡っている。かつて自分たちが寝起きしていた家にいまは赤の他人が生活している、そんなことはあまり信じたくなかった。そこでぼくは川の下流に沿って並んでいる店を眺めていた。まず目の前が地方銀行の支店、次が郵便局、ふたつとも石造り、木造でない建物は町でこの二軒だけだ。それから洋品屋、酒造店、時計屋……。店屋の並ぶ順に視線を移動させているうちに、どこかが変だぞ、と思いはじめた。前とはなにかがちがっている。ぼくは眼をつむり三年前のそのあたりの様子を泛べてみた。

地方銀行の支店と郵便局、ここまでは問題がない。右や左の木造家屋を睥睨しつつでんとおさまりかえった有様は三年前と変っていない。引っ掛かるのは郵便局の隣りである。前はたしか空地で、酒造店が酒を仕込むときに使う大樽がいくつも並べてあったはずだ。するとぼくらが町を出てからその空地に洋品屋が建ったのだろう。だがそれにしては洋品屋の造りが古びていた。近寄って眼を凝らすと材木にも年代があらわれ、黒味がかっている。

旧街道に並ぶ店屋はいずれも明治あたりに建ったもので、それぞれの造作にはどこか共通したところがあった。なによりも間口が広い。小店でも四間はある。大店ともなれば八間を超えていた。店の戸はだから大店になると十四、五枚にもなる。戸はすべて硝子戸で、風や雪

の日を除いては一枚残らず戸袋に仕舞い込み店先を開けはなすのが作法のようになっていた。どの店屋も二階建てだった。二階の窓は大きく仕切ってあるが、どの窓にも櫺子が嵌っていた。表廻りに壁土を用いないことも共通している。壁のかわりに厚い頑丈な杉板が張りつめてあった。二階だけ眺めると、昔の武芸者の道場か、尋常小学校の雨天体操場といった趣がある。

洋品屋もこれと同じ造りがしてある。新しく建ったにしてはそこが変だった。どうして新開地の桜並木通りの店屋のように今風の建て方をしなかったのだろう。それよりも、どこからこのように古びた材木や板を手に入れたのだろう。それがなんだかとても気にかかってぼくはしばらく洋品屋を睨んでいた。

「どうしたの、あんなに急いでいたくせに」

弟がいつの間にか追いついていた。

「なに眺めてんの」

「先にいっていろよ」

とぼくは弟の背中を押した。

「すぐ追いつくからな」

弟はあいかわらず軀を反らせながらボストンバッグを支え、よたよたと先へ歩いていった。

五分も行けば祖母の家に着けるというのに、どうしてこの間口四間にも足らない小さな店の前から離れることができないでいるのだろう。いらいらしながら洋品屋の店先や二階の窓や板壁を眺め廻しているうちに、ぼくの視線は板壁の或る個所に貼りついたまま動かなくなってしまった。板壁の上に釘の先で「聖戦と疎開は永遠に続くのである」と長ったらしい文字が刻んであったが、この文字通りの金釘流の悪戯書きにぼくははっきりと憶えがあったからだ。

戦争中、たしか小学四年の秋から五年の夏ごろまで、ぼくは母の許を離れ祖母の家で暮していたことがある。祖母のところで暮すようになったわけは、隣りにきれいな女の子が東京から疎開してきたからで、できるだけ彼女の近くに住みたいものだと子どもながらも思いつめ、「祖母のところへどうしても行くというなら、もう母子の縁は切るから」と母が止めるのもきかず、祖母の許へ転がり込んだのだ。そのときに、戦争がこのままいつまでも続いてくれればその女の子も東京へ帰ることができないだろう、ぜひ戦争よ続いてほしい、と祈るような思いで店の二階の板壁に釘で彫りつけたのが、「聖戦と疎開は……」の十五文字だった。母とは犬猿以上の仲だったが、祖母はぼくらには優しかった。その悪戯書きが見付かったときも、腹を立てている祖父にあれこれとりな

してくれたのは祖母だった……。
しかし祖母の家の一部がどうしたわけでこんなところにあるのだろうか。
新しい疑問がぼくの胸をきりきりと締め付けはじめた。祖母の家は「アカマツ」と呼ばれていた。㊥という屋号があるのだが、十間の間口の店のすぐ左に赤松が立っていたので、それがいつの間にか屋号の代りになってしまったのである。戦前は本業の薬種商のほかに本屋や文房具店も兼ね、その郡の小学校の教科書の取次ぎもしていた。戦後は農地改革で田畑を手離し、本屋や文房具店もやめ、すこし落ち目になっていたが、それでも薬は商っているはずで、家屋の一部を切り売りするほど困っているとはとうてい信じられない。いったいなにが起ったのだろう。胸を締めあげていた疑問がいやな予感に変っていった。
「どうしたの」
一町ほど先で弟が手を振っていた。それに応えて手を挙げてみせてからトランクを持ちあげたが、トランクはぼくの心が重くなった分だけ重さを増したようだった。ぼくは弟と同じように軀を反らせてその重さと釣り合いをとりながらゆっくり足を運びはじめた。
しばらく行くと川の音が高くなった。川が左に大きく折れ、その折れ目のところが瀬になっているのである。川に合わせて街道も左に曲っている。その曲り角に立てば祖母の家の赤松が見えるはずである。ぼくらは首を伸ばして向うをのぞきこむようにして角を曲った。
赤松が見えた。見た瞬間、ぼくは軽い狼狽を覚えた。記憶のなかの赤松と較べると現実の赤松がいやに雑然としていたからだ。前は秋風の立つごとに植木職人がやってきて、赤松の姿づくりに小半日はかけていた。その丹念な葉刈りと整枝や剪定のおかげで赤松はいつもすっきりした姿で立っていた。だが、すこしずつ近づいてくる三年振りの赤松は、小枝を四方へ漫然と伸ばしているだけで、かつての凛々しさには欠けていた。
十間あった間口が半分ほどになっているのも寂しい感じだった。やはり来る途中に見かけた洋品屋は祖母の家の半分だったのだ。切り口はむろん新しい杉板できっちりと張ってあるが、全体の黒ずんだ色合いのなかに新しい杉板の部分だけはなにやら赤味を帯びていて、まっぷたつに断ち切られた鮪の胴体の切り口を見るような心持がした。
店の硝子戸はこの町の商家のならわしに従って一枚残らず開かれていた。店先に浴衣を着た若い男が正坐して、膝の上に置いた本の上に目を落している。

「あ、叔父さん……」
ぼくが小さく叫んだのが聞えたようだ。叔父が顔をあげた。薄暗い店の中に叔父の白っぽい浴衣と蒼白い顔がくっきりと浮かび上って見える。
「ご厄介になります」
ぼくは店の中にトランクをさし入れるように置き、叔父に軽く会釈した。弟もぼくを真似てお辞儀をした。
「……やぁ」
叔父は微かに笑ったようだが、すぐに目を膝の上の本へ戻した。
「昨日、ばっちゃから書留を貰ったんです」
ぼくは開襟シャツのポケットからふたつに折った封筒を抜き出して、叔父の目の前に掲げた。シャツの生地を透してしみ出した汗で封筒は湿っぽくなっていた。表書のインクが汗で滲んでいる。
「……とにかく帰っておいでって書いてあったものだから、今朝早く孤児院を発ってきたんです」
叔父はしばらく封筒を見つめていた。見つめていたというより睨みつけていたといった方がいいかも知れない。ぼくは気圧されてのろのろした仕草で封筒を胸におさめた。
「叔父ちゃ、ばっちゃは？」
「裏じゃないかな。畑にいるだろう」
はじめて叔父は声らしい声を発し、言葉らしい言葉を喋った。ぼくはそれが嬉しくて吻とした。店の中に入りながらぼくは訊いた。
「叔父さんも夏休みですか」
三年前ぼくらが町を出るすこし前、叔父は東京の私大に入学した。順調に行っているならもう四年のはずだった。
「……来年は卒業でしょう」
「大学は二年でやめたよ」
吐き捨てるような口調だった。弟はびくりとしてぼくのうしろに隠れた。叔父は再び膝の上の本に目を落し、大きな音をさせて頁をめくった。
「畑へ行ってみます」
ぼくと弟は足音を殺して横の通用門へ歩きだした。
「店先に荷物を置かれちゃ困るな」
本を睨んだままで叔父が言った。ぼくはすみませんを何回も連発しながら、トランクとボストンバッグを両手にさげて通用門へまわった。
通用門をくぐり抜けると庭になる。庭に向い合って長い縁側がのびている。その縁側に荷物を置くと、ぼくらは裏へ走り出た。このあたりの商家は家屋の裏に二百坪

から三百坪の畑を持っている。野菜は自給自足なのだ。そのためかどうか、町に八百屋は少なかった。

畑は荒れ果てていた。雑草だけがはびこっている。ただ、敷地の中を流れる小川に沿って、トマトの赤や茄子の紫やさやえんどうや胡瓜の緑が見えていた。ぱちんぱちんと鋏を使う音がそのあたりでしていた。

「……ばっちゃー」

ぼくらが叫ぶと、鋏の音がやんだ。

「どこ？」

トマトの植えてあるあたりで白いものが動いた。ぼくと弟はそこを目がけて走っていった。

「ばっちゃ、来たよ」

「おお、来たか」

叔父と同じように白っぽい色の浴衣を着た祖母が襷を外しながら何度も頷いている。足許に置いた籠の中に大粒のトマトが光っていた。

「よく来たねえ」

「お金、ありがとう」

「足りなかったろう、あれっぽっちじゃ……」

「二千円そっくり残ってる」

ぼくは胸のポケットを左手で抑えてみせた。

「交通費は孤児院の先生から貰ったんだ」

「ありがたい先生がただねえ」

小虫が眼に入ったと言い訳をしながら祖母は袂で眼頭をそっと拭った。

「ばっちゃ、来る途中に洋品屋があったけど、あれはばっちゃの家だよね」

「おまえたちが町を出ていったころだと思うけど、じっちゃが死んでねえ」

そのことはぼくも知っていた。葬式へ行くというぼくと、あんな鬼爺の葬式になど出る必要がないと言い張る母との間で喧嘩になってしまったものだ。結局、ぼくが言い負かされて葬式には出ないでしまったが。

「……じっちゃが死んでから、うちにだいぶ借金があったことがわかったのだよ。それで店を半分、人手に渡したわけ……」

祖母はぽんぽんと浴衣の前を手で叩いた。

「三年振りじゃないか。陰気な話はよそうね。風呂を沸してあげるからまず汗をお流し……」

ぼくと弟は祖母の後について家の方へ歩き出した。陽はだいぶ西に傾いていた。雑草の上を涼しい風が渡ってくる。断髪にした祖母の髪が四、五本はらはらと風にそよいだ。後から見ると祖母はずいぶん小さく見えた。本当に祖母が小さくなったのか、あるいはぼくらの背が伸

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c